

雨が降り続いた7月。6月の干ばつから、恵みの雨ではなく、恐怖の雨となりました。全国各地の被災地の方々、心からお見舞い申し上げます。大地もあちこち雨で荒れた場所を見つけ、今年の雨の多さを実感します。同時に、雨毎に、緑が濃くなり、畑の作物がぐんぐん伸び、草がどンドン茂り、草刈り作業が追いつかないほどです。それだけ、エネルギーが自然からあふれ出ています。

こんな環境の7月でも、野外に出なかった日は1日のみ。(警報の出た日は、倒木や地盤の緩みに備えて) それ以外は、常に雨風関係なく、雨具を着て遊びました。

どんな天気でも、常にポジティブにその自然を満喫します。だから、あのめまぐるしい天気であった夕涼み会も、平然と突然の雨にも動揺せず平然と楽しんでくれました。習慣とは、すごいものです。

その夕涼み会。コロナで、今年度様々なイベントが自粛されてきた中で、ようやくまさに強行できました。皆様の執念のお陰です。笑って笑って!! 汗をかいて、感動して 静かに感じた夕暮れだったのではないのでしょうか。一昨日 絆でールレストランスタッフ(当日 レストランから見ていたらしい)からの一報を聞きました。「どこの高校のチアガールを呼んだんですか?」(これは確かにそう見えるでしょう レストランまでのあの距離だったら!?)

こんな世相だからこそ、子ども達の周囲の大人の元気さ 楽しさ 真剣さ 面白さ 人生を謳歌するエネルギー そして笑いが、健康の源だと感じます。

冬を元気に乗り切るには、夏どれだけ健康な汗を流すか。そして、静と動の規則正しいリズムを刻むかです。これは、子どもが自然にできるわけではなく、全て大人が作り上げて習慣づけていくことが大切です。

いよいよ夏休み。素晴らしい夏を満喫してください。



【親馬鹿 子孝行 地震雷火事子ども】

父親セミナー以来、もう一度 父親や夫婦のあり方が、現代にどのように合致しているのかなどを考えて本を読み続ける中で 「親子の位置の逆転」ということがクローズアップされていました。その中で

①親馬鹿とは(この言葉は ヨーロッパの言葉には直訳できない言い方らしい)

卓下しているように聞こえるが、実際は謙遜ではなく、子どものいいなりになり、許してはいけないことを許した場合の逃げ口上 自己弁護であり、親たる責任軽視の一言に尽きるらしい。知りながらも知らないふりをする 一種の自己ごまかしだという、ギクッとする指摘でした

②子孝行(親孝行 と言う言葉は聞いたことがあるが 子孝行は新語か?)

子どもが病気にならないように、けがをしないように、嫌なことにぶつからないように、先生に叱られないように、忘れ物をしないようになど、細かい点を親がなんでもかんでも小さい所まで心を配りに心配して子どもに全面的に奉仕する。食べ物 衣類 オモチャ 小遣い 贅沢品まで子どもの要求を聞き、中には要求がなくても、それを察してかなくてやる親がいる。周囲の友達や家庭もそうしている、自分の若いときの苦勞を子どもに味わせたくない というような 甘えっぱなしの子煩悩 のことを言うらしい。まさに 親子の位置の逆転を示す現象の一つです。子どもは、親の 寛大さ に慣れ、親が何でも要求したら許してくれる という錯覚に陥り易いと言うことです

③地震雷火事子ども(ご存じ おやじ ではない)

犯しがたい威厳と人生を手引きするしつけをもたらず役割を備えた父親が、おとなしい民主主義パパになり、その位置から格下げになり、代わりに台頭してきたのが、暴君と呼ばれがちな子ども。親は おとなしい仁君 になった。あまりに物わかりがよすぎる。子どもが嫌がることは言わないやらない。子どもから嫌われたくない。小言やお叱りは妻や先生に任せる。妻の手前見せかけで叱る。子どものおねだりやわがままにも何の抵抗もなく応じる。怒鳴りつけることもしない。そんな「ありがたい 慈父」には反発する余地も必要もない。衝突もない。衝突も反発もないと言うことは、権威がある証拠だと思っはならない。それは権威ではなく 薄っぺらな人気であり、自己欺瞞である。薄っぺらな人気をとれる人は、他人にも山ほどいるし、代替え人はたくさんいる。

大抵の子どもは、たとえ一時的に喜んでいても、そんな偽人気を歓迎しない。かえって「損した 親父が甘すぎた」という感想は、反抗期を無事卒業した青年男女の口からよく聞く。(現代では この反抗期すらない子どもも増えている 母子密着) 慈父を歓迎しているようだが、心の奥底では頼りとなる強き父親を求めている。

最近の傾向として 「まだ小さいから」「大きくなったそのうちわかるだろう」「みなそうしているから」などと自己弁護して、幼児の時から 子どもの軽率や無礼 口の利き方 勝手わがまま 乱暴 公共の中での振る舞い などをしっかりとたしなめることなく多めに見てきた結果、確実に 子ども達(幼児を含め) 非 無道徳的無軌道な振る舞いは 年々増えているように思えます。少子化で子どもが希少価値になり、極度に大事にされることが多くなり、生活や遊びや食事や家族の行動の決定が子ども尺度で、子どもの要求が家族の動きを決めるといふ、まさにお客様お姫様待遇(父親のリクエストは最後!!)を感じる家庭も少なくないのではないのでしょうか。

自由 子どもの眼差しを受け入れる 子どもの気持ちを尊重する 民主主義 自主性 などの言葉の流れの中で、大人と子どもの関係が、縦から横 更に逆転してしまった場合が多いように感じられます。

人生は旅に例えられます。旅には目的地があり、それにより方向例えば上り列車が下りが決まります。つまり、目的地により 人の選択が制約されます。人生も同じ。人間は正しく生きる義務があり、良い行い 道徳的な正しい振る舞い それが人間の道であり、それが目的地です。人間は 実際道を外れて悪い行いをしたい 自分に対して甘い 楽をしたい 辛いことから逃げたい 怠惰であり誘惑に弱い。それは悪いからではなく人間だから。そして、人間は自由だから、その悪い方を選ぶこともできます。善と悪をどちらかを選択する自由を持っています。選択する自由だけです。しかし、人間は自由であっても、よい人間でなければならないという目的があるだけに、選択すべき物は限定されるし、悪を選ぶ自由はなくなります。その目的地に導くのは、親の務めです。自分に負けないように 自分に克つような人間にならなくてはならない。その力を身につけさせてやることこそが 親の使命だと思います。

子どもは一人前ではないだけに、社会人になるまでは 親子は対等でもなければ平等でもなく、親は目的地を目指して、正しく生きる生活の知恵を教えて、その知恵を生活能力にまで育て上げねばならない意味で、遠慮なく子どもに教えていくことは必要です。それには、人生の先輩として上司として、子どもに権威を持って教える事こそが、特に父親の役割だと感じます。

イクメンパパのセミナーで、家庭に母親は2人いてもどうか? という話をしました。そんな皮肉な文章。学歴社会 肩書き世界の中で 「育児教室卒」 「家事のよろず屋」「家庭にもう一人の母親型父親」「母子母子家庭」はいらない